

## 特 集

# 新潟県厚生連看護専門学校の新卒看護士の平成15年度新入生と 新卒看護士の抱負

佐渡看護専門学校（佐渡郡金井町、昭和10年（1935年）創立）

中央看護専門学校（長岡市、昭和27年（1952年）創立）

## 1. 緒言にかえて

新潟県厚生連佐渡看護専門学校、副学校長

川原 恵子

佐渡看護専門学校は3年課程の看護学校としては26年、佐渡に初めて看護教育が発足した昭和10年の見習看護婦養成の時代から数えて68年もの長い歴史をもつ学校であり、島内出身者はもとより県外からの入学者もあります。

卒業生は全国各地で「佐渡看護専門学校」の卒業生としての誇りを胸に活躍しており、在校生にとっては頼もしい先輩達がたくさんいます。

また、平成13年新潟県厚生連との合併を機に教育

カリキュラムの全面的な見直しを図り、今社会が求める看護職への期待に沿える教育を目指し、教職員一同全力を注いでいます。

この度投稿させていただいたそれぞれ3名の新入生・新卒者をはじめ、佐渡で生まれた小さな種が10年・20年後、臨床の豊かな土壌で育てられ、大きく花開くことを期待して日々学生達とかかわっており、彼らの今後の成長を大いに楽しみにしているところです。

中央看護専門学校、副学校長

林 幸子

当校はひまわりの花をシンボルマークに、健康的で暖かく誰からも愛される看護士の育成をめざし教育にあたっています。

そして、3年後には新潟県厚生連病院で地域住民の健康の担い手として、看護を実践し、日々研鑽する努力を惜しまない、そんな卒業生像を期待しているところです。

昭和27年の准看護師養成所に始まり、50余年が経

過しました。

平成15年3月の卒業生56名を含めると、2,087名が巣立ったこととなります。

4月に新入生53名を迎え、伝統と歴史の重さを感じています。

このたび、厚生連医誌に卒業生及び新入生の声を載せて頂く機会を与えられましたことに感謝申し上げます。

## 2. 新入生としての抱負

### 2-1. 看護学校に入学して ―看護学校に入学して思うこと―

佐渡看護専門学校 1年

高橋 ひろ美

私が看護師を目指そうと思ったきっかけは小学五年生の時に友人とデイサービスにボランティア活動に行ったことでした。そこに来られた老年者の方と話を

することで、その人ひとりひとりの生きざまを知ることができ、それが自分にとって新鮮で、大変興味深く聞くことができました。また、そこで働いていた職員

の方がいきいきと仕事をされている姿に心をうたれました。それから毎年、その施設でのボランティア活動に参加していくうちに、人と関わる仕事につきたいと思うようになりました。そして、幅広く医療について学んでみたいと思い、看護師という道を選びました。今は「看護とは」漠然としたイメージでしかありませんが、これからの3年間で自分の目指す看護を明らかにできたらと思っています。

希望を胸に入学して3カ月経ち、少し今後の自分の課題が見えてきました。

一つは人とのコミュニケーションのとり方についてです。看護は人間が対象であり、信頼関係の上に成り立っていくのでコミュニケーションは重要と思われまます。私は高校生までは、人と深く関わる事が少なかったのですが、入学してグループワーク等を通し、人の考え方の違いを認めること、また、自分の意見を相手に伝えていくことで人間関係が築けていけるということを実感しました。さらに、人の意見を聞くことで、

自分の考え方も広がったり、深められたりすることができると思いました。これから、まず家族、友人や先輩とよいコミュニケーションがはかれ、看護に生かせるように努めていく必要があると思います。

二つ目は、趣味を持つということです。趣味を持つことにより、自分の人間性が豊かになると考えるからです。人間性の豊かさは、患者さんの幅広く、深い理解へとつながると思います。3年間でいろいろな物事に興味・関心を持って視野を広げていきたいと思えます。看護学だけでなく、社会についても目を向けていく必要があると思います。このようなことを通して、自分の人間性を高めていき、患者さんの理解につなげるように努力していきたいと思えます。

看護師は、人の命をあずかる重大な責任のある仕事です。安全に安楽に患者さんに援助ができるよう、一日一日の看護学校での学習を大切にしていきたいと思えます。そして、患者さんの立場にたて、信頼される看護師になれるように頑張っていきたいと思えます。

## 2-2. 看護学校に入学して 一再出発として看護の道へ

### 佐渡看護専門学校 1年

さくま  
佐久間

みやこ  
都

中学3年の頃から、『自分には何ができるのか、自分にしかやれない事はないのか』と、常に考えていました。その頃からパン職人に憧れ始め、高校卒業後には職人見習として、石川県のパン屋さんで働き始めました。1年半後、疲労の為か急性膵炎になり入院しました。目の前の事をただ追いかけていたので自分が倒れた事が信じられず、その時持っていたやる気も一気に冷めてしまいました。それから仕事を辞め実家に帰る事にしたのです。

実家に帰り、『自分は何がやりたいのか、自分には何が出来るのか』と、今後の将来について考えていました。それから更に3年が経ち、私は看護の道に進もうと決断しました。そのきっかけとなったのは入院中に一人の女性と出逢った事でした。心臓疾患の手術目的で入院してきた75歳のその女性は笑顔の素敵な方でした。自分の在り方に悩んでいた私に、「大丈夫、大丈夫。がんばりましょう！」と接してくれ、「いつか夢は叶う」と、励ましの言葉をかけてくれました。そして、「ここまで生きさせてもらったんだから、私も人の為に何かしようと思っているの」と、さりげなく話をしてくださいました。その言葉が心に残り、私は看護の道に進もうと考えたのです。以前の私の心の中

に、『人の役に立ちたい』という考えは無く自分の事だけしか考えていませんでした。しかし、私より年上で、私より重い病と闘っている方にそのような励ましをもらい、自分の中で大きな心の動きがありました。その頃から“看護”を職業として考えた時、自分は入院経験もあるし、目の前の対象者の気持ちになって考えることができるのではないだろうか。また、一生涯の職業としてやっていけるのではないかと頭に浮かびました。そして24歳の春、佐渡看護専門学校に入学しようと決意しました。

6月の中旬、おろしたての実習服を着て初めての病院実習に行きました。実習では、療養環境・各職種の仕事や役割を知る事ができました。また、患者さんとの関わりを見学した事で今まで何気無く見たり・聞いたりしていた事が、看護としてどのような意味があるのか理解でき、多くの学びを得ることが出来たように思えます。

今後の学生生活では今までの体験を糧とし、根柢を持った技術が提供できるよう、日々の学習を積み重ねていきたいと思えます。さらに、対象者の気持ちを大切に考え、公平な関わり方が出来るように自分を磨いていきたいです。

## 2-3. 看護学校に入学して —私のめざす看護—

佐渡看護専門学校 1年

白井久美子

高校生の頃、進路を決めるにあたり「人と接していただける仕事をしたい。また、自分の長所でもある明るい性格を生かせる仕事をしたい。」さらに、「人に何かを伝えたり、役に立てる仕事をしたい。」という強い気持ちがいつも心の中にありました。そんな時、親戚のおばあちゃんが入院をし、病院に足を運ぶ機会が多くなりました。病室の中には寝たきりの人もいれば、意識があっても自分で自立できないで介助を必要としている人など、様々な障害を抱えた人々がいました。また、「もう良くはならない」と生きる希望をなくしている方もいました。そんな中で、どの患者さんに対しても臨機応変に対応している看護師の姿や、患者さんと共感し合いながら患者の欲求に応じている姿にひかれるものがありました。また、親戚のおばあちゃんの死に対しては、「辛かったね。頑張ったね。」と最後まで声をかけながら最後のケアをしている姿には、一人の人間としての看護がそこにある様に思いました。私も含めて身内の人達が泣き崩れている中でも、静かに看とってくれたその精神の強さに感動をしました。同時に、人間の命の尊さや重さも感じ、看護は人を助けるだけでなくターミナル期にさしかかっている患者さんに対しては、安らかな死を迎えられる様に援助していくことも大事な看護の役割なんだと感じました。この体験を通して、自分も病んでいる人に生きる勇気や希望を与えられたら、そして、喜びも悲しみも共感し合いながら自分にしかできない看護、自分らしい看護

が提供できる様になりたいと思い、看護を目指すことにしました。

入学をして4カ月。看護というものを色々な角度から学んでいます。命をあずかる職業であるからこそ、それに伴う厳しさも感じています。初めての実習では、医療の行われている場を見学し、看護の対象や看護の役割、他の職種の人達とのつながりを理解することができました。その中で、一人の命は医師や看護師だけでなく、他の職種の人々あるいは家族であったりと、多くの人々の支えの中で守られていることを知りました。中でも、一番患者さんと接している時間が長い看護師は、身体的苦痛を取り除くだけでなく、同時に精神的苦痛も取り除いてあげることが大切だと思いました。また、患者さん一人一人がおかれている立場や状況を把握し、周りの環境を整えることや家族への配慮も看護師の重要な仕事だということを感じました。

日々の学習や実習を通して、常に患者さんと同等の立場で人間としての看護を行っていきたいと思っています。そして、自分が患者さんにとつての良き理解者、時には代弁者となれる様に信頼関係を築きあげられる様になりたいと思っています。そのためには、自分の人間性や感受性を磨いていくことが大切だと思います。この3年間は、仲間と共にお互いを高め合い協力しながら夢に向かって努力していきたいです。

## 2-4. 看護の難しさの中で見つけた充実感

中央看護専門学校 1年

小川竜太

新しい学校生活が始まってからもうすでに6ヶ月がたとうとしています。初めは何もかも不安だらけで、落ち込むことがとても多かったのですが、慌しい生活にも何とか慣れて現在では充実した学校生活を過ごしています。

私は下越の出身で、この学校への進学で現在は一人暮らしをしています。引越当初は、家族や地元の友人から離れて暮らすという孤独感、疎外感から精神的にとつてもつらい思いをしました。学校へ行っても、周りは女性ばかりですので、どこへ行っても孤独感はいつもついて回っていた記憶があります。学習面でも高校とはまったく違った専門分野の勉強ばかりで、慣れるまでに相当苦労しました。

学校が始まって一週間ほどで、果たして三年間続けていけるのかどうか不安になった学校生活も、一ヶ月も経てば何とか慣れてきて、学習面も生活面も安定し

てきました。ですが、このごろになって私の進む道は本当にこれでよかったのかと迷うことがよくありました。看護の難しさは予想以上で、続けていけるかどうか、また自分に合っているかどうかと、看護の勉強が進むほどにその難しさに気づき始め、本当に悩みました。そんな中で、私の転機になったのが、6月上旬に行われた病院実習でした。

病院実習では、何もできない自分に失望したり苛立ったりすることもたくさんありましたが、環境整備や患者さんとのコミュニケーションが何とかうまくいった時、特に患者さんの笑顔を見れた時に得られる充実感は、なんとも言い難い本当に嬉しいものでした。また、学校の先輩の環境整備やコミュニケーションは自分とはくらべものにならないほど上手で、自分も早く先輩に近づきたいという気持ちが湧きました。

看護師はとても責任の重い仕事です。それは精神的

なものであったり身体的なものであったりといろいろあると思います。しかし、その責任の中で得られる充実感や達成感は、今回患者さんの笑顔を見たときのように本当に嬉しいものです。この充実感や達成感のためなら、私は多少の苦勞を我慢して頑張っている自信をこの実習で得ることができました。

私の学校には、看護師の大先輩として何にでも相談に乗ってくださる先生方と、お互いに切磋琢磨できる仲間がたくさんいます。この恵まれた環境の中で、患者さんから笑顔をもらうことのできるたくましいナースになることが、今の私の一番の目標です。

## 2-5. 入学してみて

中央看護専門学校 1年

鈴木純子

私は4月にこの学校に入学するとき、すごく不安と期待でいっぱいでした。どちらかという不安のほうが大きく、新しい土地で、知っている人もいない環境でうまくやっていたらどうか。勉強についていけるのだろうかなど、様々な事を考え不安でいっぱいでした。

最初のうちは今までやったことのないレポートの課題にとまどい、自分の時間をうまく使うことができず自分のペースがつかめませんでした。そして講義では90分授業が初めてだったのでそれに慣れるのに少し時間がかかりました。

学校にもだいたい慣れてきたときに、初めての病院実習がありました。たった2日間という短い時間でした

が私にとってすごく勉強になることがたくさんありました。一つは、患者さんのベッド周りの環境整備をさせて頂いた時です。授業では生活用品のない所で練習していたので、実際にはうまくいかなくて時間を要してしまいました。しかし、終わったあと、サンルームに患者さんを迎えにいった時「きれいになった、ありがとう」と言って下さいました。私は本当に嬉しくやってよかったと思いました。

また、2日間を通してコミュニケーションの難しさも知りました。入学してから様々な事を学びました。これからも看護に必要な知識、技術をしっかり学び、身につけていきたいと思っています。

## 3. 新人看護師としての抱負

### 3-1. 看護学校を卒業して —社会人としての抱負—

佐渡看護専門学校 卒業、佐渡総合病院5階西病棟

松本朋恵

看護学校を卒業し、看護師として働き始めて早いもので数ヶ月が経過しました。日々の仕事にも徐々に慣れてはきたものの、まだまだ覚えることはたくさんあるというのが現実で、仕事と学習に追われ、日々忙しい毎日を送っています。

そんな中で、私が社会人として働くようになって強く感じた事があります。

ひとつは、看護師となった今、看護学生として学ぶ立場であった自分とはまた異なることが今の自分に要求されているということです。学生の時、自分は学ぶ立場であり「看護師」になるために必要な知識や技術を修得するために日々授業や臨床実習へ向かっていました。しかし看護師となった今、学生の時と同じく学んで行くことも必要なのですが、加えて、資格を持ち得たものとしての責任を自覚し誇りを持って仕事して行くことも同時に要求されていることを強く感じています。学生の時とは違い、処置や援助ひとつひとつに責任があります。そんな中で任された処置を「やったことないからできない」「分からないけど適当に

やってみよう」などで済ませるわけには行きません。わからないこと・自分で判断できないことは先輩看護師に聞いて助言を受けたり、技術的にできないことは一部手伝ってもらいながら行ったり、先輩にお願いした場合も、全て頼るのではなく、処置を見学させてもらうなどして学習し、できないことをカバーしていかなければなりません。まだまだできないことの方が多く、時々自分の未熟さに落ち込んでしまったり、色々プレッシャーを感じてしまう面も多いですが、不安や焦りにのみまされず一つ一つ向き合い、自分のペースを保ってやっていこうと心がけています。

もうひとつ強く感じたことは、改めて看護とはやりがいのある仕事だということです。仕事をしていて失敗や困難におち当たるたび、私は看護師に向いていないんじゃないか、こんな道目指すんじゃないか、と何度も後悔しました。しかしちょっとした自分の援助でも喜んでくれる患者さんの顔を見るとやっぱり頑張らなくては、と思える自分もいたりします。また、人と人との関わりやそれを通して自分を見つめ直す事も

多く、この仕事に就いていないと感じたり経験したりできないだろうと思えることも多く、やはり素晴らしい仕事であることを実感します。

「失敗を楽しむ人生を」

最近とても好きな言葉です。社会人として、看護師として、これからも悩み事や困難はついてくるでしょう。それでもやっぱり自分らしさを失わず頑張っていきたいと思います。

## 3-2. 看護学校を卒業して —社会人としての抱負—

佐渡看護専門学校 卒業、佐渡総合病院 4 階東病棟

中塚 絵理

私は、今年の4月から看護師として佐渡総合病院の4階東病棟に勤務しています。就職してから3ヶ月が経ち、業務にも少しずつ慣れてきましたが、まだまだ勉強しなくてはならないことが沢山あり、忙しい毎日を送っています。

私の勤めている4階東病棟は主に外科系であり、入院も激しく非常に忙しい病棟であり、私はいつも業務に追われているというのが現状です。そのため、業務の流れに振り回され、患者さんの訴えを十分に聞くことができなかつたり、また忙しそうに動き回っているため、患者さんに話しかけづらい印象を与えています。

就職して2ヶ月目に、入院していたターミナル期の患者さんが亡くなりました。この患者さんにはずっと家族が交替で付き添っていました。私も何度かその患者さんの部屋受け持ちになったり、夜勤の時などに関わらせて頂いたことがありました。私は、初めて重症の患者さんと接し、日々変化していく患者さんの状態や、苦しむ患者さんを目の前にしてどうしていいのかわからずに、心の中で動揺していました。この心の中の動揺が態度にも現れてしまっていたのかも知れません。後で聞いた話ですが、その患者さんに付き添っていた家族の方が、「中塚さんは一生懸命やってくれるがオドオドしている。」と言っていたそうです。私は、その話を聞いてとても申し訳ない気持ちになりました。

ターミナル期にある患者さんや家族は、日々徐々に具合が悪くなっていく患者さんの状態に対して、常に不安を抱えています。そんな時、一番患者さんや家族の側にいる看護師の動揺した態度を見たら、きっと余計に不安を抱いてしまうでしょう。私は自分に余裕がなかったために患者さんや家族への精神的な援助や配慮ができていなかったのだと思います。しかし、いくら今年看護学校を卒業したばかりの看護師とはいえ、患者さんや家族にとっては一人の看護師なのです。私には、看護師としてのプロの自覚と分からないことは分からないなりに先輩看護師に報告・連絡・相談することが足りなかったのではないかと思います。

社会人とは、仕事に対して責任を持って業務を遂行する役割を負った人であると思います。また、看護師は患者さんに対して、身体的・精神的・社会的援助を行う役割を負っています。これらすべての面から援助を行ってこそプロの看護師といえるのではないかと思います。しかし、新卒の私にこれら全てを完璧に一人でこなすことは難しいと思われま。私がこの1年で課題とするのは日々勉強し、疾患や治療・看護についての知識を得ることと、分からないことやあれ？と思った事は報告・連絡・相談すること、これらを日々の患者さんとの関わりの中で自己を見つめ直し、努力していきたいと思っています。

## 3-3. 看護学校を卒業して —社会人としての抱負—

佐渡看護専門学校 卒業、佐渡総合病院 3 階病棟

本田 智子

これまで学校で様々な学習をしてきましたが、いざ病院で看護師として多くの患者さんに関わると、さらに応用力を身につけなければ出来ないことが数多くありました。例えばポータブルトイレでの排泄の介助一つにしても、片麻痺があったり骨折等で足の荷重ができなかつたりして設置場所や介助する際の立ち位置または支持する部位は患者さん一人一人異なります。それらに関しては先輩の看護師さん達から教わったり、見たり体験することで身につけて行くことも必要となります。その為、何事も積極的に見たり聞いたり自分から行動して行きたいと思っています。もちろん

予習や復習・練習というように自分で学習しなければ、自分のものとすることはできないと思います。そして、何が出来て何が出来ないのか、どうすれば出来るようになるのか、何について教わればいいのかというように振り返り、自分自身を知らなければならぬと思うのです。なぜなら、分かつたつもりでは、事故等の危険を招く恐れがあるからです。初めは、分からないことも多く不安ばかりですが、だからこそ自分に『これで大丈夫？』と問かけ、客観的に自分をみて、出来なければ手伝って欲しいと言えることが大切だと思っています。先程、先輩看護師さんと積極的に関

わると述べましたが、このことは知識や技術、経験年数等に限らず看護師という立場で意識的に関わり、協力し合わなければならないと思います。それは、毎日毎時間私一人が一人の患者さんを看護しているわけではなく、常に引き継がれているからです。一人では出来ないことや分からないことでも二人あるいは三人というように、誰かがいれば出来たり分かることがあるでしょうし、その方がより良い看護が提供できる場合が多いからです。また同じ看護師間だけでなく、医師や他の医療・福祉に関わる各専門職種とも情報交換したり相談し合うことも大切なことです。私の職場では月に一度『リハビリカンファレンス』といって医師、看護師、理学・作業・言語療法士が集まり、リハビリをしている患者さんに対して退院に向けて患者さんのレベルに合わせた一貫したケアがなされるように、現在の状況や今後の見通し等について話し合う場が設けられています。このようにそれぞれが持つ情報や各専門職からの意見を出し合うことで、より具体的な患者さんの個性に合わせたケアがなされるのだと思います。もちろん、より良いケアは私達が納得したり、満足するのではなく患者さんや家族が良いと思えなくてはなりません。患者さんは中には施設を住まいとする

方もいますが、本来は家族と自宅で生活しているものです。もしも、患者さんだけを対象とする看護の仕方をした場合、いざ退院となり自宅に帰って患者から家族の一員に戻ろうとしても、一人の力ではできないことが出てくるかも知れません。そうならない為にも、前もって家の改造や家族の心身の準備といったことが必要になってきますし、入院中から積極的に家族にも関わり必要な看護を提供しなければなりません。よって患者さんや家族とよく話したりして、それぞれの思いを理解した上で関わるのが大切だと思います。

最後に、看護師という資格を持つ社会人として大切なことは、学生の時とは違う『責任』を持つことであると考えます。例えば病院の職員として病棟のスタッフとして、固定チームメンバーとして、患者さんの受け持ちとして、それぞれ果たすべき責任が課せられています。それらに対して、自分は何をしなければならぬのかという事を理解して、行動できなければ責任を持って成し遂げることはできません。よって『責任』を持つことは、それに対して十分な理解と的確な判断等が要求されるため、人の生命を預かる専門職業人として最も重要であると考え、今後の基盤にしたいと思っています。

### 3-4. 卒業して8ヶ月が過ぎて

中央看護専門学校 卒業、整形外科病棟勤務

わか つき よし え  
若 月 淑 恵

看護学校を卒業し、看護師として勤務を始めて振り返ってみると、とても早く過ぎた8ヶ月間だった。

4月、緊張と不安でいっぱいだった。とにかく毎日が精一杯で周りのことがあまり見えていなかった気がする。

また、慣れない環境の中で今まで同年代の仲間と関わるだけであったが、仕事現場では様々なスタッフと関わりを持ち、良い人間関係を築いていかななくてはならない。

今までとは全く違う環境、そして観察力・技術・知識・患者様とのコミュニケーションの取り方全てにおいて未熟である自分への苛立ち、あせりから辛く、涙したり、逃げ出したいと思うこともあった。

しかし、周りの看護師のサポートがあったからこそ日々過ごしてこれたと感じている。

学生の頃学んだ基礎から理解していなければ患者様の状態を把握できず、また個性を重視した援助が出来ない。私は教科書で学習したことよりも、実際を知ったり、経験することで自分の知識として残りやすく、理解も深まると思う。

臨床実習では、一人の患者様を受け持ち援助してき

た。一つの病棟を数週間しか経験できないのだから、その病棟特有なことを受け持ち患者様以外でも機会を見つけて、もっと積極的に経験するという気持ちで実習に臨めば良かったと思う。

そしてわからないこと、疑問に思ったことは自分で調べ、それでも理解できなかったことは、もっと積極的に質問し、多くの学びを自分のものとしておくべきだったと感じた。そして臨床に出てみて学生の頃の学習や実習がいかに大切な時間であったかと思った。

勤務して実感したことは、まず自分の行為で生命の危機を招く可能性が常にあると言うことだ。1人の患者様を援助するのではなく、多くの患者様の情報収集をして、まず優先順位を考えた行動をしなくてはスムーズに援助することができず、患者様に迷惑をかけることにもなる。新人だからという気持ちではなく、1人の看護師として処置や援助全てに、責任が必要である。わからないこと、不安なことは自分の判断だけで行動するのではなく、相談しながらこれからも毎日緊張と責任を持って患者様に対し、安全安楽に援助していきたい。

### 3-5. 8ヶ月間を振り返って

中央看護専門学校 卒業、本館5階病棟

つち だ や よい  
土 田 弥 生

今年の4月に看護師として就職し、早くも8ヶ月が経とうとしています。

現在勤務している病棟は、糖尿病・血液・神経・腎疾患の病棟ですが、私は腎疾患を主とするチームで、腎不全の保存期から透析期までのあらゆる経過にある患者様と関わっています。同じ腎不全でも、患者様により治療内容、透析の種類、またその方の年齢、自己管理能力、家族背景などが異なります。よって、その患者様の症状に合わせた看護を展開していかなければならず、その分多くの知識や技術を必要とします。

さらに、根治が不可能とされている腎不全と一生付

き合っていかなければならない患者様の不安や緊張を軽減することも看護師の大きな役割です。しかし、自分の知識、経験不足から、患者様に余計な不安や苛立ちを与えてしまっているだろうと思うことや、“もっとこうしてあげればよかった”と悔しい思いをすることが多く、自分の無力さを感じています。そして、看護の難しさを強く感じます。

正直なところ“まだ新卒だから”と自分に言い訳をすることもありますが、看護師として患者様と関わる以上、自分なりに努力を重ね、患者様・その家族に喜ばれる看護を提供できたらと思います。